『日本言語文化研究』第十七号（二〇一三）

【研究ノート】

野上彌生子『真知子』の軌跡 ―狂気から自然へ―

笹川 博司

一

斯んなことで今日もすんでしまふ。

斯んなことで今年もすんでしまふ。（一六一頁）

二十四歳目前の真知子は、「真によく生活した意識なしに年を送ることの無為と空虚」（同頁）を思い、同時に、「暦の変化が自分のこの状態に何等の寄与もなし得ない」（同頁）と思うと、「苛立たしい寂しさ」（一六二頁）を感じ、「自分を取り巻くあの堪らない生活から脱け出したい」（二〇七頁）と願っている。真知子は、「プチ・ブルジョアの標本的な退屈と滑稽と醜陋に充ちてゐる親類」（七六頁）や母親から結婚をせかされているが、「有閑階級の奢

侈や欺瞞や饒舌や暇潰し」（一五二頁）を厭い、「それを軽蔑しながらなほその集団から脱却することの出来ない自分」（同頁）をもどかしく思っている。

そういう真知子の前に、二人の男性が登場する。関三郎と河井輝彦である。

二

関三郎は、東北の農村の水車小屋の息子で、関西の大学に在学中左翼運動に関係して起訴中の身であった。彼は「プロレタリアトの意識は血の問題だと云ふ信仰」（四九頁）を持っていて、真知子にはよそよそしかった。しかし「到来すべき新たな時代」（七二頁）を信じ、「一切の不公平を取り除く組織の実現」（同頁）を信じている関の、「それを信じないのは、人類を信じないのです」（七三頁）という一言に、真知子は驚きと憧れを抱き、自分を取り巻く世界からの脱出願望をいっそう強くする。

関と真知子が初めて出会うのは、真知子の友人大庭米子の遠縁にあたる画家の建てた田端の家である。その家には、やがて左翼仲間の米子、関、小峰が住むことになる。見落としてならないのは、その家が建つ丘の下に「脳病院」（五〇頁）があるという設定である。真知子が米子から「関三郎」という名前を初めて聞いた直後、「気狂ひ」（五一頁）が叫び出す。

殺すんだな。――畜生！　おつ母さん――お母さん――お母さん――（五〇頁）

それは「野獣の咆哮に近」（同頁）い「恐ろしい叫び声」（同頁）だった。「激しい怒りと絶望の訴に充ちて響いた」（同頁）この叫びは、単に「気狂ひ」のものと読み飛ばしてよいとは思われない。

関との出会いが、最初から狂気の「気味悪さ」（五六頁）の中で用意されているのは、真知子と関の関係の行く末を暗示していよう。あるいはまた、左翼運動そのものが、真知子の住む世界から見ると、不気味な印象とともに語るのがふさわしいと、作者が考えたからかもしれない。

狂気とは、日常性を離れ、常識の世界を超えたものである。「退屈と滑稽と醜陋に充ちてゐる」真知子の日常とは異次元の人間として、真知子の常識の世界を超えた存在として関三郎は登場するのだ。

関の真知子に対する「素つ気なさ」（五三頁）「冷淡」（五五頁）「よそ／＼し」（五六頁）さは、真知子を取り巻く、社交的な「饒舌」の世界とは異質であり、真知子は関や小峰が理解できず、寂寥感や「変な不快感」（五六頁）を覚えることにもなる。しかし同時に、関は、真知子の中で、自分を「あの堪らない」日常から脱出させてくれるかもしれない存在として意識されていく。

三

一方、河井輝彦は、「有名な旧家で千万長者の河井家」（二一頁）の後嗣で、「ケンブリッヂに留学して考古学を専攻し」（同頁）ている「上品な風采と態度」（二五頁）を持つ紳士である。真知子は、嫂（あね）の実家の田口家の園遊会で初めて河井を知る。柘植多喜子の婚約者として紹介されるのである。

しかし、数ヵ月後、真知子は、河井から突然とも思える求婚を受ける。―「あなたにお目にかゝるまでは、自分のおかれた位置に対しわりと呑気でゐた」（二六七頁）という言葉から遡って、河井の真知子に対する態度をふりかえると、たしかに、河井が真知子を特別に意識していたことに気づく。

それは、真知子が関への恋に破れ、帰っていく場所として、河井という男性が当初から作者の中で意図されていたことを示すものであろう。

関と河井は、ほぼ同時期、真知子の前に登場し、それぞれに真知子を意識することになる。河井は、関よりも、真知子と接触するずっと多くの機会があったにもかかわらず、真知子の方の受けとめ方の違いから、真知子の意識の隅に追いやられたままであった。

河井の求婚は、次の厳しい言葉で拒絶される。

同じ自由と権利を奪はれた人たちが、奪はれたものを取り返さうとして、戦つてゐますわ。…その中で、どうしたら一万年前の人間の使つたがらくたなんぞ問題にしてゐらつしやれるかともふと、…あなたのさう云ふ生活のお相伴をしようとは思ひませんわ。（二七二頁）

四

クライマックスで、この関と河井の位置は逆転する。

階級的正義の前には、個人的な恋愛における非人間的な行為も、目的のための手段として肯定する関に、真知子は失望する。米子の妊娠でそれは決定的になった。「非人間的」という点で、真知子にとって関は「気狂ひ」だった。真知子と関が互いの愛を告白した日もそうだ。関は「低い、調子の破れた、どこか崖下の気狂ひに似た叫び」を上げ、「気狂ひと同じ形相」で真知子に「蔽ひかぶさつた」（二九四頁）のだった。

「気狂ひ」になるというのは、何かに夢中になることだが、そのとき同時に、別の基本的なものが欠落してしま

う場合があり、それゆえに、何かに夢中になる状態を「気狂ひ」というのであろう。階級闘争に夢中になるあまり、人間らしさが欠落することに無反省になっている、そんな関に真知子は絶望するのである。

「何もかも」「分らなくなつた」（三二九頁）真知子は、三ヶ月後、河井と再会し、河井の中に「人間としての真実」（三四八頁）を発見することになる。

そのときの情景描写が注目される。雷雨が晴れていくのと、二人の心が打ち解けていくのが、同時進行で語られるのだ。

雷鳴は驟雨を伴なつて真上に来た。ぶつ突かるしぶきで、霜に凍つた朝のやうに窓硝子は、まつ白になり、電光がそれを引き裂いた。家は轟く音波の中で、海にある船のやうに揺れた。（三三九頁）…雷は間を加へたが、雨は衰へなかつた。（三四二頁）…雨が小降りになり、風が吹いた。（三四五頁）…日光が庭樹のしづくの間から、俄かに潑剌と輝き、額に直射した。（三四八頁）

真知子の河井との「邂逅」（三七六頁）が「自然」の推移であるかの如く書かれている。

その後、真知子は、米子の田舎を訪ね、彼女に「私をあんた達について行かれなくしたものも、云はゞその不自然さだわ」（三七〇頁）と言う。そして「足もとの草むらに野生の苺を見つけ」「何て綺麗なのだらう」と思う。真知子には「なにか驚くべき美しいものにそれがその瞬間見え」、「彼女は輝く赤い斑点から眼を離さなかつた」。（三七四頁）

五

作者は真知子の純粋さを大切にしながら、純粋さゆえにそこに含まれる「狂気」（危険な陥穽）を批判した。

何もかも分からなくなった真知子は、「自然」の中に再生のきっかけを発見する。河井に対する「隠されてゐた愛」（三八二頁）に気がついた真知子は、かつて軽蔑していた有閑階級に戻っていったわけではないだろう。真知子の影響を受けて河井自身も変化している。

ただし、将来、真知子や河井がどのように生きていくのかは描かれず、若い真知子の今後の人生はまったくの未知数のまま小説は終わっている。

（追記）

野上彌生子の小説『真知子』は、雑誌「改造」や「中央公論」に、昭和三年五月から昭和五年十二月にかけて発表された。初刊は昭和六年四月。引用は『野上彌生子全小説』第七巻（岩波書店・一九九七年）によった。今日から見れば不適切と思われる表現があるが、時代背景と作品価値とを考え、著者が故人でもあるのでそのままにした。

本稿は、大正末から昭和初期にかけて「自然」という概念が近代の詩人や小説家に与えた影響の大きさを考えていた卒論作成前後の研究ノートの一部である。なお、京都府立大学に提出した卒業論文「『梢の巣にて』成立前後の山村暮鳥―詩風の変化と「人間畜生の自然」―」は、京都女子中学・高等学校「研究紀要」第二十六号（昭和五十六年三月）に活字化している。興味のある方は、どうぞ、ご一読を。

（大阪大谷大学教育学部・同大学院文学研究科教授）